＜実行委員後記＞

大学院の授業の一環として私たちが力を入れて書き進めてきた「レビュー論文集」をこの世に出すことができて、涙が出るほど感動しました。昨年の前期から書き始め、執筆から編集作業まで1年以上の歳月を経てやっと完成しました。このレビュー論文は最初、ゼミの学生査読者から厳しいコメントを頂いて、書き直した上でまたゼミで発表したりするような繰り返しでした。このようにして、練り上げた論文を数名の外部の査読者に査読していていただいて、さらに厳しいコメントが返ってきて、また書き直し完成したものです。やっと論文が通った後、今度は表紙の色、表紙、目次、奥付などの準備に取り組みました。こんなに手間暇をかけて完成した「レビュー論文集」を多くの方に読んでいただければ幸いです。準備段階で前号の実行委員の方々に大変お世話になりました。この場を借りて心からの感謝を伝えたいと思います。(柳　川子)

今回は、レビュー論文集のタイトルに「2003年版」という文字が追加され、いよいよシリーズものとしての実質的な一歩を踏み出しました。

今回の編集作業をしている間、執筆者の方々の表情の変化がとても印象的でした。論文の締切日は私が中国への派遣から帰国した3日後でした。まだ帰国ボケ真っ只中の私の目に、論文を書ききった直後の執筆者たちの鋭い表情が飛び込んできました。そして提出後の一瞬の安堵感の後、査読してくださった先生方からのコメントに応えるべく、最終稿を提出するまでの再び苦しい期間。ゼミ終了後の「中華料理食べに行かない？」などという声はぱったり聞こえなくなり、いつもはにぎやかな私の周辺から笑顔が減り、四六時中真剣そのものの顔が並んでいるような気がしました。そして今、本誌に登場する自信作のレビュー論文とともに、再び「中華料理食べに行かない？」という元気はつらつとした声と顔が復活しています。「季節の移り変わり」のようなものを作業を進めながらしみじみと感じたものです。

そんなさまざまな季節を通して誕生した論文を集めたこの本が、多くの第二言語習得研究者や日本語教育関係者の手にとられることを祈っています。

どちらかと言えば極楽トンボ系の今回の編集事務局実行委員の二人が作業をスムーズに進められたのは、前回の実行委員の方々が膨大な手間と時間をかけて土台を築いてくださっていたこと、執筆者の方々のご協力、そのほか、周囲の方々の暖かい励ましやご協力があってこそでした。そして、何よりも大変丁寧に査読してくださった先生方には、心より感謝しております。(遠山　千佳)

編集事務局実行委員

2003年11月